

## 私の履歴書

# —大学人としてのMy Interesting Life—

早いもので、半年で兵庫医科大学を定年になる。医師としてほぼ40年働き続けてきた。今回長年エディターとしてかかわらせていただいた『THE GI FOREFRONT』にエディターズメッセージを書くことになった。何を書いてもいいというので、これまでの私の医師としての履歴書を書いてみたい。私の履歴書といえば日経か読売の連載のように思えるが、それほど偉くもないし、たとえ書かせてもらっても誰も読んでくれるはずもない。しかし教授退官記念集にも何かこのようなことを書くことになるはずなので、ちょうどいい機会だと思った。ものぐさとの誹りを受けることは覚悟の上であるが、時間のある輩は少しお付き合いいただきたい。

私は大阪市で生まれて、堺市で育った。大阪教育大学（当時は学芸大学）付属天王寺小学校、中学校、高校を経て鹿児島大学医学部に入学した。実家は大阪なのに鹿児島大学に行ったことには2つの理由がある。まず1つは大学入試に失敗したことである。若い先生方は知らないと思うが、その頃の医学部には一期校、二期校というのがあって、その2つで受験日が違っていた。医学部のある大学の多くは一期校で、二期校は数えるほどしかなく鹿児島大学はその1つだった。一期校の大阪大学に不合格だったので仕方なく二期校を受けた。大阪医科大学などの私立の医学部には合格していたが（両親は当

然関西の私大を強く薦めたが）、全く迷いなく親元から遠く離れて生活することを選んだ。2つ目は私の家の出が南九州であるからである。親戚を始め三輪の一族郎党は宮崎にいたし（私の本籍は宮崎県である）、鹿児島にはその親戚もいた。こうして6年間、鹿児島大学の医学部で学んだ。卒業後の進路で悩み、野球部の先輩で尊敬する消化器内科の政信太郎先生に相談した。ダンディでやさしく、そして超一流の消化器内科医である政先生に心酔していたからである。政先生は消化器疾患のレントゲン診断を得意とし、二重造影法の開発者として有名な順天堂大学の白壁彦夫先生を師と仰いでおられた。「三輪君は若いうちに最高レベルの医学に触れるべきだ」とのご配慮で白壁先生に紹介のお手紙を書いていただいた。こうして鹿児島大学を卒業して順天堂大学で研修を受けることとなった。

順天堂大学の研修医は医師というよりもまさに丁稚奉公のような感じだった。研修医時代の給料は3万円、40年前でも到底生活できる金額ではない。でも大学はそんなことは気にしない。そんな時代だった。半年ほどは実家から送りをしてもらっていたが、その後は当直や検診のアルバイトで食いつないだ。今でこそ研修医のアルバイトはご法度であるが、その頃はアルバイトしないと生活できない。何の制限もないが、逆に何が起きても自己責任である。昼間は病院で働いて夜間に当直のアル

バイトに行って生活費を稼ぐ。夜はほとんど寝られないこともあったが、眠たさを我慢して次の日もフルで働く。若くないとできないことだが、若かったのになんとかこなしていた。2年の研修医を終えて消化器内科に入局してからも専攻医という身分で給料はなく外勤と当直で暮らしていた。特に最初の数年間は病棟患者の受け持ちと内視鏡・レントゲン検査に忙殺され、ギリギリのところで踏ん張っていた。胃がんの内視鏡・レントゲン診断はパターン認識である。小さながんをたくさん見る、たくさん見つけることによって診断技術が上がっていく。努力すればするほど技術が高くなる。このことを肌で感じていたので頑張れた。入局した時の医局長であった故泉嗣彦先生から「医局の中でいつも最後に帰る医局員になれ」と言われた。その言葉が心に突き刺さった。とにかく病院に長くいることがいい医者なることにつながると信じて頑張った。医局の中では最も遅くまで病院に残っている医師の一人だったと思う。

しばらくして私の研究生活が始まった。初めて全国規模の学会に演題を出したのは甲府で開催された第29回日本消化器病学会大会である。ちょうど発表の2~3日前から受け持ち患者の容体が悪くなった。胃の末期がん患者で根治的治療の適応はない状況だったが呼吸状態が悪くなり、尿量が減少してきた。ただ主治医として患者の最後